

道徳教育の授業開発に関する実践的研究：  
郷土資料の開発とシティズンシップ教育の課題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤井, 基貴, 生澤, 繁樹 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00007784">https://doi.org/10.14945/00007784</a>

## 道徳教育の授業開発に関する実践的研究

### —郷土資料の開発とシティズンシップ教育の課題—

藤井基貴\* 生澤繁樹\*\*

## A Study on the Lesson Plan of Moral Education : Development of Local History Materials in Shizuoka

Motoki Fujii and Shigeki Izawa

### Abstract

The purpose of this paper is to offer original teaching materials and lesson plans focusing on the great person of Shizuoka in moral education. In this paper we report our project in moral education and propose a review of materials development, and then clarify the possibility of this lesson plans for moral thinking. In conclusion we examine the significance of this project and the problems to be improved form the viewpoint of reading materials and citizenship education.

キーワード：道徳教育 授業開発 郷土資料 シティズンシップ

### はじめに

現代の道徳教育の課題の一つは「魅力ある教材の開発」にあると言われている。なかでも、地域社会に根ざした郷土資料を作成し、これを「道徳の時間」において積極的に活用することが学校や教師に求められている。

2008年に改訂された学習指導要領では、「指導計画の作成と内容の取り扱い」において「先人の伝記、自然、伝統と文化、スポーツなどを題材とし、児童が感動を覚えるような魅力的な教材の開発を通して、児童（生徒）の発達の段階や特性等を考慮した創意工夫ある指導を行うこと」（下線筆者）と記され、下線部に示した「先人の伝記」および「伝統と文化」が新たに書き加えられた。『小学校学習指導要領解説 道徳編』においても、いわゆる「郷土愛」に関する内容項目として、低学年 4-(5)「郷土の文化や生活に親しみ、愛着を持つ」、中学年 4-(5)「郷土の伝統と文化を大切にし、郷土を愛する心を持つ」、高学年 4-(7)「郷土や我が国の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心を持つ」と指導方針および内容が系統的に示されている。

こうしたなかで「先人の伝記」や「伝統と文化」を題材とする教材や授業を開発するにあたっては、価値

伝達型の道徳教育のスタイルに固執するあまり、それらを美化および単純化し過ぎてしまわないよう注意が必要となる。多様な価値が生起・展開するような授業のダイナミクスを生み出すには、児童生徒がさまざまな情報や知識を吸収しながら自らの「価値観」や「判断力」を成長させられるよう、児童生徒の判断材料として資する情報をいかに収集、整理、検討して教材を開発できるかが重要となる。

本論文では、2010年度に静岡県内の三つの小学校で実施した「静岡県の偉人に学ぶ道徳教育」の取り組みを記録としてまとめ、郷土資料を活用した「道徳の授業」の開発方法を記すとともに、その課題と可能性を検討する。

（文責：藤井）

## 1 郷土資料の開発と実践プロジェクト

### 1-1 プロジェクトのねらい

本プロジェクトは、2010年4月より藤井研究室に所属する学生8名を中心として、およそ1年間をかけて取り組んだものである。その成果は2011年3月に報告書『道徳教育の授業開発—郷土資料づくりからはじめる道徳授業—』としてまとめられた。

本プロジェクトは次の三つの目的をもって進められた。第一に、静岡県の小学校で利用するための新たな道徳教育用の郷土資料を開発すること、第二に、開発した資料の授業での活用方法を検討すること、第三に、

\*静岡大学教育学部 \*\*上越教育大学

教員を目指す学生たちが教材および授業を開発するための知識や技術を習得すること、である。

道徳の授業においては「読み物資料」を中心とした副読本が広く利用されている。読み物資料は文部科学省や教材会社を中心に多数出版されており、扱う内容やテーマも多岐にわたる。静岡県においても『心ゆたかに』という副読本が作成されており、そのなかにも郷土の偉人に関する資料が数多く収録されている。本プロジェクトは、学生の視点から新たに児童生徒に紹介したい人物を捜し出すところから出発し、その人物に関する情報を文献およびインタビューを通して収集して、授業のねらいを定め、教材づくりを進めた。

資料の活用にあたっては、一般に「共感的活用」、「感動的活用」、「範例的活用」、「批判的活用」と呼ばれる類型がある。これまでの道徳教育の実践においては主人公の気持ちを読み取らせながら、ねらいとする内容項目への自覚を促す「共感的活用」のスタイルが主流となってきた。近年では、資料の活用方法の偏りに対する反省から、話し合い活動を取り入れるなど新たな資料の活用方法も追究されている。本プロジェクトの授業実践においても、すべてに話し合いや意見交換の時間を取り入れることで、郷土の偉人に学びつつ、それを自らの生き方にどう活かしていけるかを問いかける授業づくりを目指した。

また、これから教師を目指す学生たちは単なる教える専門職者としてだけでなく、新たな教材や授業を生み出せる専門的力を養う必要がある。学校現場は多忙化しており、教材を作成する時間的余裕はなかなか取りづらくなっている。加えて、道徳の授業にあたって

も多数の教材があふれており、それらの選択を続けることで授業を実践していくことも可能である。こうした状況のなかでこそ教師としての信念（＝ティーチング・フィロソフィー）に基づいた実践をいかに生み出していけるかが問われている。本プロジェクトでは、「読み物資料」を作成する上でのノウハウを習得するとともに、作成の難しさを実感することを通して、学生たちがより高次の教材開発力および指導力を獲得することを目的とした。

## 1-2 先行資料の検討

プロジェクトの開始時においては、県内で広く利用されている『心ゆたかに』（小学校道徳副読本、2009年度版）に収録されている郷土資料、および平成21年に静岡県が作成した郷土資料『輝く静岡の先人』の検討を行った。

副読本『心ゆたかに』は表1に示すとおり静岡県の偉人に関する資料が収録されている。本プロジェクトにおいては、これらの資料を輪読し、その特徴と活用方法の検討を進めていくとともに、それらを一つの範型として郷土資料の教材作成に活かした。

郷土資料『輝く静岡の偉人』は「静岡県発展の基礎を築いた郷土の先人を再認識し、あらためて郷土への関心を高めるとともに、県内外に向けて情報発信すること」を目的としてまとめられたものであり、政治、産業・経済、文化・芸術、社会事業、福祉、教育などの諸分野から54人の人物を紹介している。同資料は郷土史学習の補助資料として活用されることを念頭において執筆されているため、道徳授業の教材との質的な相違点がある。このことは教材作成を進める過程に

表1 『心ゆたかに』における偉人 (Cf. 藤井編 2011)

学年	タイトル	ねらい	内容項目	時代	地域	内容
小3	わさび田を開く	郷土愛	4-(5)	江戸	伊豆市	「伊豆のわさび」を生んだ板垣勘四郎さん
小3	せい茶を日本一に	勤勉・努力	1-(2)	明治	菊川市	「あら茶のみき」を発明した高村謙三さん
小3	愛鷹をまもる	勤労・社会奉仕	4-(2)	平成	裾野市	愛鷹山をまもる加藤みつるさん(五十雀会)
小4	フジヤマのトビウオ	勤勉・努力・不撓不屈	1-(2)	昭和	浜松市	静岡が誇るスイマー古橋広之進さん
小4	深良用水	郷土愛	4-(5)	江戸	裾野市	用水路をつくらせた大原源之丞さん
小5	テレビの父 高柳健次郎	向上心・個性伸長	1-(6)	大正	浜松市	ブラウン管を発明した高柳健次郎さん
小5	おばあさんの心	尊敬・感謝	2-(5)	昭和	島田市	空き缶拾いで寄付を続けた水野はつさん
小5	安倍杉の焼き下駄	真理・創意・進取	1-(5)	江戸	静岡市	下駄職人の本間久次郎さん
小5	日本人の手でオルガンを	真理・創意・進取	1-(5)	明治	浜松市	日本製のオルガンを作った山本重補さん
小5	肉脛堀	郷土愛・愛国心	4-(7)	江戸	沼津市	村のために堀をつくらせた植田内膳さん
小6	よみがえった「つたの緋道」	郷土愛	4-(7)	昭和	静岡市	「つたの緋道」をつくらせた春田徳雄さん
小6	盲人に生きる力を	勤労・社会奉仕	4-(4)	明治	浜松市	日本のヘレン・ケラーと呼ばれる小杉あきさん
小6	夢の実現	真理・創意・進取	1-(5)	昭和	浜松市	オートバイや自動車の製造で成功した本田宗一郎さん
小6	茶の種をまいた人	尊敬・感謝	2-(5)	鎌倉	静岡市	聖一國師のお話を伝承するおばあさん
小6	わたしの体を五等分に	社会的役割・責任	4-(3)	平成	神戸市	阪神淡路大震災の救出活動・池内清さん
小6	目が見えなくてもぼくはぼく	向上心・個性伸長	1-(6)	平成	浜松市	目が見えなくなっても夢を追いかけた河合統一さん
小6	目標に向かって	不撓不屈	1-(2)	明治	掛川市	「女医育ての母」と呼ばれた吉岡弥生さん

において道徳と郷土学習との目的の違いを自覚する上で有効であった。これらの先行資料の検討を通して、道徳授業で利用する郷土資料の枠組を明確にした上で、授業のねらいを固めていった。

### 1-3 題材およびテーマの選定

次に先行資料の検討から得られた知見をもとに、AからCの三班に分かれて、題材およびテーマについて検討を進めた。その結果、以下の三つが選定された。

A班 「富士川の堤防である雁堤をつくった偉人」として古郡家親子三代を取り上げる。

(資料名) 「富士市を守る雁堤」

B班 「静岡県出身で国際的に活躍した偉人」として古橋廣之進を取り上げる

(資料名) 「泳心一路」

C班 「家族に反対されながらも夢の実現のためアフガニスタンで農業支援を行った偉人」として伊藤和也さんを取り上げる。

(資料名) 「夢と家族」

### 1-4 情報収集と資料の執筆

本プロジェクトにおいて、もっとも時間をかけて取り組んだのは情報収集と資料の執筆作業であった。作業開始時はインターネット、新聞記事、関連文献などで情報を収集し、その上で偉人にゆかりのある場所、文書館、関係者を訪ねて史実の把握に努めた。

A班「富士市を守る雁堤」では、古郡家に関する文献および史料の発掘を地元の図書館で行うとともに、古郡家にゆかりある富士市瑞林寺を訪ね、同寺の住職さんへのインタビューを行って、雁堤を古郡家三代にわたる偉業として文章化する方針を固めた。

B班「泳心一路」では、浜松市にある ToBio (古橋廣之進記念浜松市総合水泳場) で情報収集を行うとともに、生前の古橋さんと親交のあった河合純一さんへのインタビューを行い、選手としてだけでなく、指導者としての生き方にも焦点を当てた資料としてまとめる方針を固めた。

C班「夢と家族」では、伊藤さんについて書かれた文献および新聞記事を中心に情報を集めるとともに、伊藤さんも一時加わっていたアフガニスタン支援 NGO 団体「カレーズの会」が発行している資料や親交のあった方々へのインタビューを通して、夢と家族の間で揺れた伊藤さんの葛藤に焦点をあてて資料作成を進めた。

執筆した資料については研究室で毎週読み合わせを行うとともに、静岡大学の教職大学院に在籍する現職の学校教師および静岡県教育委員会道徳教育推進協議

会の委員の方にも指導助言をいただき、資料としての完成度の向上に努めた。資料の初稿から最終稿に至るまでには2010年6月から2011年1月までの8ヶ月の期間を費やした。

### 1-5 授業実践と課題

A班「富士市を守る雁堤」の授業は2011年1月26日(木)に富士市立青葉台小学校6年3組で実施された。授業においては、静岡県の地図を掲示して、富士川を視覚的にわかりやすく示すことに努めるとともに、当時と現在の道具の違いを導入部分で問うことで昔の工事の過酷さを強調した(資料1)。

クラスのなかには以前の郷土学習等で雁堤や古郡家についての知識を持つ児童も見受けられた。本授業のねらいは、古郡家の偉業を称えることに止まらず、そこから学び取ったことを自分の地域での生き方にどう活かすかを問うことにあった。そのために自分が地域に貢献できることを児童に書かせるワークシートを作成し、話し合いおよび発表の時間を重視した。

授業後の検討会においては参観いただいた先生方から、ねらいとする内容項目について「郷土愛」と「勤労・社会奉仕」が混在しているのではという指摘を受けた。この問題は資料の内容を読み取らせる「展開前段」と価値の一般化および主体的自覚化を目指す「展開後段」との接続の妥当性および接続の充実の問題としても捉えることができるだろう。授業を郷土の偉人への礼賛にとどめることなく、自らの生き方へと主体的に反映させていく展開の工夫が授業の第一の課題となることが参観した学生たちにも自覚された。

写真1 A班の授業の様子

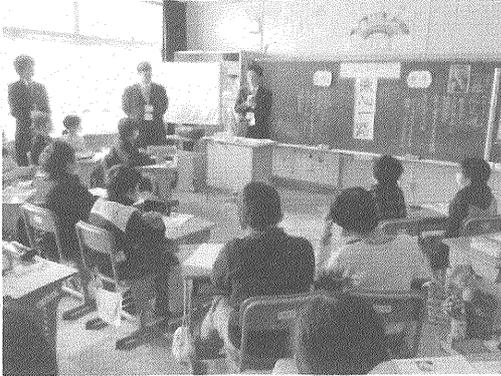


B班「泳心一路」の授業は2011年1月27日(金)に浜松市立西都台小学校5年2組で実施された。本授業は古橋廣之進の水泳に対するひたむきな思いがこめられた「泳心一路」の言葉を中心に構成された。授業の前半部では資料を丁寧に朗読し、古橋の選手として活躍や挫折、指導者として信念を児童に読み取らせた。後半部においては児童に自らの「〇〇一路」を考えさせて、児童自身がこれまで努力したこと、これから努力したいことを発表させた(資料2)。

授業のふりかえりでは、資料の読み取りや話し合い

活動に十分な時間がとれなかったことが課題として挙げられ、そのことによって生涯にわたって信念ある生き方を大切にするという資料にこめたメッセージを十分に伝えることができなかったことが反省点となった。同班からは二時限構成での授業の実施することも改善策として提案された。

写真2 B班の授業の様子

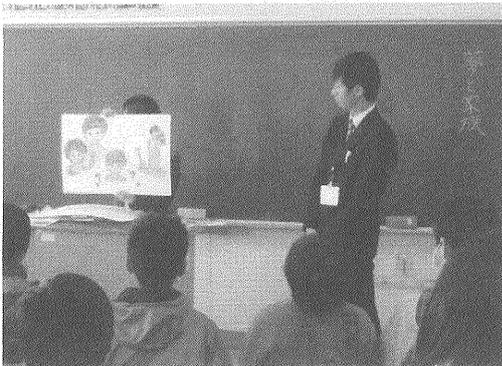


C班「夢と家族」の授業は2011年1月31日(月)に静岡市立大里東小学校6年2組で実施された。同班は伊藤さんの葛藤に注目して、モラルジレンマ授業のスタイルを採用した。

資料は紙芝居形式で作成され、授業の前半部では、危険な場所に行って農業支援を「する派」、「しない派」のグループに分かれて意見交換を行った。授業の後半部では紙芝居が実話に基づくことであることを伝え、伊藤さんの生涯とその偉業について詳しく説明を行い、児童に感想を書かせた(資料3)。

本授業はモラルジレンマのスタイルで実施されたことによって、話し合い活動も活発となり、三つの実践のなかではもっとも児童の自然な発言を引き出すことに成功したといえる。しかしながら、他の二つの授業のように授業の偉人の生き方から自分の生き方へと反映させる授業展開とは逆の展開を辿るため、授業のしめくりに際して伊藤さんの偉業をどのように伝えることができるかについて改善の余地が残った。

写真3 C班の授業の様子



## 1-6 プロジェクトの検証

上記の三つの教材の作成および授業の実践について

2011年2月27日(日)に上越教育大学の生澤研究室の院生および学部生とともに検討会を開催した。検討会の詳細については報告書(藤井編2011)を参照されたい。

同検討会で主たる論点となったことは、郷土資料を活用した道徳授業の利点についてである。学生たちからは「児童に身近な内容であるため授業に入りやすい」、「地域の方をゲスト講師として招きやすい」、「地域のことを知ることで地域に対する意識が高まりやすい」、「シティズンシップ教育の教材としても活用できる」といった意見が出された。また、郷土資料を作成する意義については、地域の素材を掘り起こして、教材化し、それを授業として実践するだけに止まらず、授業の内容を最終的に地域に還元することもできるという開発過程においては気づくことのできなかった視点や意義も確認された。

本プロジェクトは「静岡県の偉人に学ぶ道徳教育」をテーマとして、教材作成のための情報収集と読み物としての完成度を高めることに多くの時間を割くことで、取り上げた偉人を推論に基づいて美化したり、史実を単純化することがないように教材開発に注力した。さらに教材開発者が実際に授業者となることで教師の主体性や自律性に根ざした授業の実践を目指した。プロジェクトの取り組みは地元の新聞や教育委員会の機関誌でも紹介され(2011年1月29日 中日新聞朝刊「静大生が教師役 道徳授業」、2011年1月30日 静岡新聞朝刊「“先生”は静大生3人『郷土の偉人』教材作り授業」、2011年2月1日 静岡新聞朝刊「故“伊藤和也”さん教材に」、2011年3月7日 Eジャーナルしずおか「道徳教育の実践 悩んで!真迷って!德育」)、学校関係者を中心に多くの有益なフィードバックをいただいた。

以上が、本プロジェクトにおける郷土資料の開発と実践の概要である。

(文責:藤井)

## 2 郷土資料から道徳授業をデザインする

次に、上記の開発記録と実践報告を受けて、本プロジェクトの取り組みの意義、成果、可能性について理論的な検討を試みたい。ここでは、郷土資料から道徳授業をデザインすることの可能性とこれからの課題について、①読み物資料、②多様性のある展開、③シティズンシップ教育という観点から振り返り、簡単に問題提起をする。

### 2-1 読み物資料の内側から道徳授業を問いなおす

私たちが知るように、道徳教育において「読み物資料」を活用するという授業実践の取り組みは、きわめてオーソドックスな手法である。小学校学習指導要領解説(道徳編)の説明においても、読み物資料の吟味

と活用は、学習指導案作成の手順や多様な学習指導の構想を考える上で重要な位置を占めている。なかでも、本プロジェクトにおいて制作された資料のように、人物が登場する読み物資料については、「資料中の登場人物の行為や心の動き、資料に対する児童の感じ方や考え方などを分析し、どのようにすれば児童の学習意欲を高め、道徳的価値の自覚を深めることができるかなどについて多面的に検討する」（文部科学省 2008a：82）が必要であるとされている。さらに、読み物資料を活用した指導にあたり、「登場人物への共感を中心とした展開にするだけでなく、資料に対する感動を大事にする展開にしたり、迷いや葛藤を大切にしたりした展開、知見や気づきを得ることを重視した展開、批判的な見方を含めた展開にしたりするなど、資料の特徴を生かした指導の手順や学習過程の工夫が求められる」（同上：85）とも言われている。これは、中学校の道徳編においてもほぼ同種のことが述べられる。

ところが、良くも悪くもオーソドックスであるだけに、読み物資料に対する風当たりの強さは並大抵でない。なぜなら、読み物資料とは、ときに「徳目」を教え込むこと（徳目主義）や「気持ち」を問うこと（心情主義）を中心とした、素朴な道徳伝達のための主要な道具として使われることもあるからである。そこでは、「共感」や「感動」を誘ったり、あるいはもう少し思考の射程を広げて「モラルジレンマ」（迷いや葛藤）が取り扱われたりするとしても、子どもたちの「知的発見」や「批判的なものの見方」を育む展開を意識した指導に直接結びつくとは限らない。そのような批判の声も当然のことながら予期される。子どもたちは、しばしば抽象的で身近なものとは感じられない価値項目でさえ、あたかも既成の「解答」があるかのように、読み物資料を通してすでに主題のなかに掲げられた「徳目」を唱え、教師の意向を汲みとりながら登場人物の「気持ち」を先読みするスキルを身につけていく（Cf. 松下 2002）。

この種の道徳教育の問題や課題については、さらに松下（2011）の指摘が詳しい。それによれば、読み物資料を使用する道徳授業の困難は、①資料のなかに必ずしも適切な行為が描かれているとは限らないこと、②そこでは学習者よりも教える側にとって望ましく都合な行為が「道徳的な」ものとされがちであること、③学習者が問題を立てなおし新たな解決案を探究したり創出したり、また、④資料に描かれた行為がどうして道徳的なのかを考えたりするよりも、子どもたちは単に符丁を合わせたり、事実と期待を混同したり、教師の意図やねらいや思惑を言い当てるゲームとなるといった難点とつねに隣り合わせである（松下 2011：67-69）。こうして読み物資料の方法は、子どもの学びに即しているというよりは、むしろそれ自体が教師の主導に基づく伝統的なスタイルと同一視され、非難

の槍玉にあげられることになるのである。

しかしながら、本プロジェクトの郷土資料づくりからはじめる道徳授業の実践では、それぞれあくまで「読み物資料」の制作と活用にこだわったという点にここで改めて着目しておこう。子どもたちにとっての身近な「郷土」を題材としつつ取材を重ね、自前で作成された資料をもとに道徳授業をデザインする。ある面でこれは、単に読み物資料を批判するということを越えている。なぜなら、読み物資料という主流な手法の内側から道徳授業を創りあげ、よりよくいえば、伝統的なスタイルを問いなおそうとするものであると考えられるからである。

このことは、教材づくりにおいて郷土の偉人や記録を「美化」し「単純化」したりすることなく、形式的な価値伝達型の道徳への執着を乗り越えようとする、本プロジェクトのなかで掲げられた趣旨からも窺える。先の1-5の「授業実践と課題」においてその概要が提示されていたように、子どもたちは「富士市を守る雁堤」「泳心一路」「夢と家族」をめぐる、静岡といくらか馴染みの深い偉人や郷土の記録を通して、たとえば努力や勤勉、感謝、生命尊重、郷土愛などについての価値理解を深めていった。三つの郷土資料の制作と活用に根ざした実践は、資料の制作者が自ら授業者となったという意味でも、教育活動の主体性や自律性を考えるにあたってじつに興味深く、挑戦的な取り組みであったことは言うまでもない。

しかし、そこには今後の取り組みにおいて改善されていくべき懸案もあると言わなければならない。やはり「読み物資料」にこだわったからこそ道徳教育の問題や課題が、同時に隠されていたようにも思われる。

## 2-2 多様性のある展開へ——郷土資料づくりの道徳から見える課題

授業者による実践の記録や授業後の振り返りでも幾つか触れられていたように（藤井編 2011）、情報収集、取材、文章作成など、およそ8ヶ月に及ぶ資料づくりにまつわる困難は、私たちの想像に難くない。それだけ教材開発には教師の専門性が問われるだろうし、その力量が大きく試されている。とはいえ、資料づくりが直面する困難は、例として物語の論理構造や伝わりやすさをいかに洗練させるかといった工夫のような、資料作成それ自体に内在する課題だけでは決してない。読み物としての郷土資料がどのような授業づくりへと展開し、その授業実践が今度は子どもたちのどのような学習活動へと実を結んでいくのか、その多様な広がり方をも守備範囲におさめて、丁寧に分析を加えておきたいところである。

読み物資料がときおり非難の舞台に晒されるのは、なにも「徳目」や「気持ち」が物語のなかに埋め込ま

れているからではない。というよりも、読み物を通した学習は、往々にして「一単位時間」に押し込められてしまう難点がある。いってみれば、そこでは価値や感情についての理解が、複数時間や他の学習活動との接続を保ちつつ、じっくり探究されるような実践となりにくい。そうした窮屈さのなかに「読み物資料」の課題が潜んでいるとはいえないだろうか。

そのように考えてみると、同じように、今回のプロジェクトにおける道徳授業の開発も、やはり「一単位時間」で実践されたがゆえの改善点が数多く残されていた。それは資料提示の仕方や板書、発問をどうするか、子どもたちの学習を深めるための話し合い、読む、書くなどの活動をどうするかといった、いわゆる「道徳の時間に生かす指導方法の工夫」（文部科学省2008a）の改善余地のみにとどまらない。そもそも「郷土」という題材は、歴史や地理などの社会的な文脈や広がりをもった題材である。その場合、郷土資料からの道徳授業が、複数時間の関連でどうリデザインされるかという可能性は、ぜひとも考えておく必要がある。さらに、より大きな中・長期的なヴィジョンから捉えたときに、体験活動、各教科等との関連、家庭や地域社会との連携、図書館等の施設や校外の場所を有効活用した指導など、学習指導要領の解説が念頭に置く「多様な学習指導の構想」（同上）にどの程度肉迫できるかということも、この実践の成果をはかる試金石となるはずである。資料づくりの外側にこそ、いっそう注意深い考察、工夫、多様性のある展開への配慮が求められてくるのである。

### 2-3 シティズンシップ教育から「郷土」を考える

それにしても、いったいなぜ「郷土」に着目するのだろうか。郷土資料からの授業実践のなかで、子どもたちはいったい何を学ぶのだろうか。郷土に触れる視角は、少なくとも「過去」、「現在」、「未来」といった時間的・空間的展望と関係するが、この「郷土」から広がる道徳授業は、はたしてどこに向かっていき、どのような「郷土」の未来へと子どもたちを誘っていくのだろうか。

道徳教育において「郷土」を取り扱う意義は、たとえば「郷土や我が国の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ」（第5学年及び第6学年）などとして、学習指導要領にもその内容が積極的に記されている。そこでこの意義を考察するための参照枠のひとつとして「シティズンシップ教育」という視角をもちだす可能性は、十分考えられる展開であろう。「郷土」を基軸としつつも、狭い意味での郷土愛の学習にとどまらず、愛国心や国際理解、国や社会や地域の構成員を形成するという意味でのシティズンシップ——いわゆる「公民的資質」や「市民

的資質」と呼ばれるもの——の育成について考えるということである。たとえば『小学校学習指導要領 社会科』の目標には、「社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」（下線筆者）という記載がある。また指導要領解説のなかでは、「地域の社会生活及び地域の発展に尽くした先人の働きなどについての理解を図り、地域社会に対する誇りと愛情を育てることや、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育てることは、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛することなどにつながるものである」（文部科学省2008b：104-105）とも述べられている。道徳授業は、それらとどのような関連を取り結んでいけるのだろうか。

本プロジェクトの教材内容と深く関わるものとして、同じく社会科の学習指導要領のなかでは「我が国の歴史上の主な事象について、人物の動きや代表的な文化遺産を中心に遺跡や文化財、資料などを活用して調べ、歴史を学ぶ意味を考えるようにするとともに、自分たちの生活の歴史的背景、我が国の歴史や先人の働きについて理解と関心を深めるようにする」（第6学年2内容(1)）という記述がある。また、小学校中学年の内容においても「地域の人々の生活について、次のことを見学、調査したり年表にまとめたりして調べ、人々の生活の変化や人々の願い、地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を考えるようにする」として、「ウ 地域の発展に尽くした先人の具体的事例」（第3学年及び第4学年2内容(5)）が挙げられている。とくに資料の活用に関しては「人物の願いや働き、文化遺産の意味などを考え、我が国の歴史に対する興味・関心や愛情を育てるようにすること」、「人物の肖像画や伝記、エピソード（逸話）などによって人物への興味・関心を高めることも大切である。また、地域の博物館や郷土資料館などの学芸員から話を聞くことは、歴史的な事象を具体的に理解する上で有効な学習である」とされている（同上：74）。

しかしこうした学習は、社会科などの「社会的なもの見方」を育てる教科学習だけで完結するものではない。むしろ、個別な学習内容に閉じられてしまいがちな種々の学習活動を相互につなげるための、全体的なプランニングと授業デザインこそが求められてくる。しばしば触れられる通り、道徳教育においては「社会科における郷土や地域の学習」といった各教科等との関連が指導を充実させるための重要な鍵となる。たとえば社会科の学習においても、「社会科の指導においては、その特質に応じて、道徳について適切に指導する必要がある」、「社会科で扱った内容や教材の中で適切なものを、道徳の時間に活用することが効果的な場合もある」（同上：105）とも述べられる。その意

味で「道徳の時間」が家庭や地域社会との連携も含めて、その役割として何を担うことができるのか、そのことが改めて問われているのである。

けれども、シティズンシップの育成とはいうものの、私たちはどのような「社会」を描き、どのような「公民」や「市民」を育てていくのだろうか。たとえば「コミュニティ（地域社会）」の成員の形成を念頭におくことと「国家」の成員としての国民の形成を念頭におくこととは、ときに議論の位相は異なってくる（Cf. 木村・小玉・船橋 2009；岡野 2009）。それらの目的やねらいは、もしかしたら相互に矛盾や葛藤さえきたすかもしれないことは容易に予想されることである。それともそこでは、「世界市民」のような生き方の形成が前提にされているというのだろうか。これらをそれぞれコミュニタリアン、ナショナル、コスモポリタンの視点からのシティズンシップ理解と解釈すれば、このアプローチの違いは、意図する／せざるにかかわらず、決して棚上げにできない問題である。

同様に、いったい「郷土」とは何だろうかということも、根本的に再考しておいてよいだろう。「郷土」から考える道徳が、資料をいかに活用するかという課題とともに、そもそも資料づくりや授業実践の出発点として「郷土」をどう考えていた（いる）のか。授業をデザインするということは、そのなかで、自らの社会観——教育される側だけでなく、とりわけ教育する側の見方——に対する自覚や反省が透けて映しだされ、問いなおされるということである。既成の社会観、社会の一員となるに相応しい道徳を意図的に教え込むインドクトリネーションは問題である。だが、向かうべき社会に対する眼差しが、教師によって無自覚に、そして無意図的に伝達されていくという光景も、一見穏やかではあるけれども、厳しく吟味されなければならないのである。

## 2-4 総括と展望

以上に、本プロジェクトの道徳授業の開発記録と実践報告を受け、幾つかの問題を投げかけてみた。「倫理」あるいは広く言葉の関連を考えると「道徳」という言葉の語源である「エートス (ἦθος)」には、「慣れ親しんだ土地」、そこに生きる人びとの「生活慣習」、それを支える「人間の性格」という意味が込められていると言われる（高橋 1992：172-173）。かつてジョン・デューイは「道徳性は社会的なものである (morality is social)」と述べていたが (Dewey 1983)、道徳授業の実践を私たちの慣れ親しんだ特定の「郷土（資料）」からはじめるという試みは、それほど奇想天外な着想ではない。しかし注視すべきは、「郷土」をめぐる馴染みの深い、既存の慣習を教えることが、道徳の唯一の使命ではないということである。よく知られるように、デューイは慣習や

道徳をただ倣うもの、学習すべきものとは考えず、それらを新たに捉えなおしたり創出したりするような反省的思考や行為に基づく道徳の見方を推奨した。そうした知見を引き継げば、「郷土」は決して固定された実体ではないし、閉じられたものでもない。完結された既存の対象として学習されるものではなく、「郷土」を通して子どもたちが「郷土」を反省的に理解したり、新たに発見しなおしたり、創りだしたりしていくことが重要である。だとすれば、いったい私たちは、未来に対して「郷土」をどのように開いておくことができるだろうか。郷土資料づくりからはじめる本プロジェクトの道徳教育の授業開発の試みは、いまだはじまったばかりであり、その考察は今後の継続的・発展的な実践と検討に委ねられている。

（文責：生澤）

## 参考文献

- 岡野八代『シティズンシップの政治学 [増補版] — 国民・国家主義批判 —』白澤社、2009年。
- 木村元・小玉重夫・船橋一男 (2009) 『教育学をつかむ』有斐閣。
- 静岡県教育研究会道徳教育研究部ほか (2009) 『改訂心ゆたかに』静岡教育出版社。
- 静岡県県民部文化芸術局文化政策室編 (2009) 『輝く静岡の偉人』静岡新聞社。
- 高橋勝 (1992) 『子どもの自己形成空間—教育哲学的アプローチ—』川島書店。
- 藤井基貴編 (2011) 『道徳教育の授業開発—郷土資料づくりからはじめる道徳授業—』静岡大学教育学部。
- 松下良平 (2002) 『知ることの力—心情主義の道徳教育を超えて—』勁草書房。
- 松下良平 (2011) 『道徳教育はホントに道徳的か?—「生きづらさ」の背景を探る—』日本図書センター。
- 文部科学省 (2008a) 『小学校学習指導要領解説 道徳編』東洋館出版社。
- 文部科学省 (2008b) 『小学校学習指導要領解説 社会編』東洋館出版社。
- Dewey, John (1983) *Human Nature and Conduct* (1922), in Jo Ann Boydston (ed.), *The Middle Works of John Dewey*, vol. 14, Carbondale: Southern Illinois University Press.

(資料1)

第6学年3組 道徳指導案

MT：奥村麻里絵

AT：美濃部あかね

日時 平成23年1月27日(木) 第5校時

主題名 「富士を守る雁堤」

ねらい

- ・親子三代で雁堤を完成させた古郡家の努力を知るとともに、工事に携わった人々の努力に感謝をする心を育てる。
- ・地域社会(富士市)と自分たちとの関わりを見つめ直し、地域社会へ貢献しようとする思いや態度を養う。

準備 静岡県の地図、ワークシート、古郡家三代の絵

過程	形態	学習活動	教師の発問と予想される子どもの反応	留意点
導入	全体	・静岡県の地図を見る	○「この川を知っていますか。」 ・「家の近くの川だ」 ・「富士川だ」	○静岡県の地図の中の富士川を指す。 ○3代の親子が間違えて捉えられないようにする。雁、堤防の説明を同時に行う。
展開		・古郡親子3代の紹介をする。 ・資料を読む。 ・話の筋を整理する。	○「今は堤防を作る時にはどのようにして造るだろうか。」 ・「コンクリートで固める。」 ・「ブロックを積む。」 ・「クレーンやショベルカーを使う。」  ○「昔(雁堤)はどのように造られただろうか。」 ・「土を固めていた。」 ・「もしかしたら機械を使わずにすべて手作業だったかもしれない。」  ○「なぜこの親子3代は堤防造りをあきらめなかったのだろう。」 ・「自分がやらないといけなかったから。」 ・「村の人のことが好きだったから。」 ・「困っている人たちを助けたかったから。」	○今と昔の違いに気づかせ、昔の工事の大変さに気付かせる。  ○自分がこの3代だったらできたかどうかなど、自分自身の問題として考えさせる。
まとめ	班	・班で、話し合う。  ・班で話し合い、自分ができるところをワークシートに書く。	○「自分の身近にこの話のような地域のために誰かががんばっているということってあるかな。」 ・「地域の清掃活動があるよ。」 ・「近くの神社で行われるお祭りの準備をしているおじさんたちを見たよ。」 ・「お母さんたちが、バザーをしているよ。そのお金で学校の備品を買ってくれているよ。」  ○「自分が地域のために何ができるか考えてみよう。」 ・「人に出会ったらあいさつをして、地域の雰囲気良くなるようにする。」 ・「海に行ったときはゴミを忘れずに持ち帰る。」 ・「清掃活動があったら、参加して街をきれいにする。」	○物語の中では村の話だったが、ここでは、地域と言い直す。 ○自分と地域との関連が出てこない場合は教師から例を挙げる。  ○ワークシートを配る。 ○自分と地域を繋げて考えさせる。

富士市を守る 雁 堤

静岡県富士市には、大きな堤防があります。堤防の名前は、雁といふ鳥が仲間と一緒に飛んでいる形に似ていることから「雁 堤」と名付けられています。

この堤防は、日本三大急流の一つである富士川沿いに作られたものです。

江戸時代、富士川の近くにある村の家や田畑は、洪水が起きるたびに流されていました。その村に住む古郡重高は、「この村に住むみんなを守りたい」

と考え、富士川の洪水により家や田畑が流されないように工夫をした堤防をつくることにしました。しかし、堤防を完成することができないまま、重高は病気で亡くなってしまったのです。

重高の子どもの古郡重政は、「この村に住むみんなのことを守りたい」という父の想いをつぎ、堤防づくりを進めました。重政は、協力してくれる仲間を集めました。堤防づくりにかかるお金は、自分の土地を売って集めました。

「私が家や田畑を守るのは、自分のためではない。国のため、そして仲間を助けるためなのだ」という信念で、堤防づくりに力をそそいだのです。

一一六〇年、重政が堤防づくりを終えてから十五年後のことです。富士川に大洪水が起り、堤防が崩れて、田畑の五千石(五千人分のお米がとれる面積)が被害を受けました。重政は落ち込む心をふるいたたせ、堤防づくりを再開しました。

9

著者

「どうしたら富士川の洪水から家や田畑を守れるのだろうか。」

重政は原因を探したり、調べたりしながら、亡くなるまで方法を考えました。

重政の堤防づくりの計画は、息子の重年へどうけつがれました。

重政と一緒に堤防づくりをしていた重年は、祖父や父の想いを知っていたので、父が考えていた計画を実行しようとした。

堤防を完成させる工事は、堤防を長くし、水をためる遊水地というものをつくる難しい工事でした。しかし、水が少ない冬に集中して工事しても、川の水が増える夏には堤防が流されてしまうという、人間の力と水との戦いが続きました。この

戦いは七年も続き、仲間は疲れはてていきました。そんな仲間を見た重年は、彼らをはげまし続け、一六七一年、ようやく古郡家の親子三代の力と仲間たちによって 雁 堤ができました。最初の工事からすでに五十三年がたっていました。洪水による被害がなくなり、人々は安心してたくさんのお米や野菜をつくることができるようになりました。

古郡家三代がつくった「雁 堤」は、富士市産業の発達、そして、人々の命、財産を今も守っています。堤防づくりをした人への感謝の気持ちを忘れないように毎年十月には「かりがね祭り」が行われています。

(資料2)

第5学年2組 道徳科学習指導案

MT：峯川壮平

AT：羽中田駿、深津臣

1. 日時 平成23年1月28日(金) 第3校時 場所：西都台小学校
2. 教材名 「泳心一路」
3. ねらい 生涯に通じる目標を立て、ひたむきに努力した古橋広之進の生き方に触れることで、自らもより高い目標を立てて、それに向かって日々努力しようとする意欲および態度を育てる。
4. 指導過程

学習内容	予想される子どものあらわれ	指導の要点																																				
○導入	<今、一生懸命取り組んでいることはあるかな？> ・勉強を頑張っている。 ・スポーツを頑張っている。	・教師のエピソードから話し、子どもが発言しやすい環境をつくる。																																				
○展開 ・課題文を範読する。 (引退後の文は隠しておき読まない)  ・本文を読みとっていく。  ・引退後の本文を範読する。 ・中心発問について考える。  ・自分の「一路」について考える。	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 33%;">                             ・世界一になりたいという目標を持っている。                         </td> <td style="width: 33%;">                             ・ハンディーキャップを持っている。                         </td> <td style="width: 33%;">                             ・誰よりも負けず嫌いな選手。                         </td> </tr> <tr> <td colspan="3" style="text-align: center;">                             &lt;広之進さんはどんな選手だったかな？&gt;                              &lt;水泳選手の広之進さんは、どんな努力をしたのかな？&gt;                         </td> </tr> <tr> <td style="border: 1px dashed black;">                             ・指のハンディーキャップを克服しようと、地球一周半もの距離を泳いだ。                         </td> <td style="border: 1px dashed black;">                             ・コーチもいなかったの で、自分で練習方法を考え、人の何十倍も泳いだ。                         </td> <td style="border: 1px dashed black;">                             ・水泳をひたすら頑張った。                         </td> </tr> <tr> <td colspan="3" style="text-align: center;">                             &lt;努力の結果大会ではどうだったかな？&gt;                         </td> </tr> <tr> <td colspan="3">                             ・日本選手権では優勝したが、オリンピックでは良い結果が出せなかったみたいだな。                         </td> </tr> <tr> <td colspan="3">                             &lt;「何も言わずプールサイドから立ちさった」広之進さんは何を考えていたのかな。&gt;                              &lt;指導者になった広之進さんは、後輩に何を伝えたかったのかな。&gt;                         </td> </tr> <tr> <td colspan="3" style="border: 2px solid black; text-align: center;">                             &lt;選手時代と全く変わらない「水泳に対する思い」はなんだろう。&gt;                         </td> </tr> <tr> <td style="border: 1px dashed black;">                             ・大会に負けてくやしくてならない気持ち。                         </td> <td style="border: 1px dashed black;">                             ・もう自分はだめだと諦めている気持ち。                         </td> <td style="border: 1px dashed black;">                             ・もう一回挑戦したいと思う気持ち。                         </td> </tr> <tr> <td style="border: 1px dashed black;">                             ・水泳が好き                         </td> <td style="border: 1px dashed black;">                             ・魚になるまで泳げ                         </td> <td style="border: 1px dashed black;">                             ・努力すること                         </td> </tr> <tr> <td colspan="3">                             ・生活態度や熱意も水泳に影響すること。                              ・魚になるまで泳げ                              ・後輩に金メダルを取って欲しい。                              ・心がちゃんとしていないと世界では勝てない                         </td> </tr> <tr> <td colspan="3">                             &lt;広之進さんは指導者になって行って後輩選手を育てていったんだね。「泳心一路」とは水泳一本にかけた広之進さんの思いが詰まっている言葉だね。&gt;                              &lt;今、自分は何か目標をもって、努力しているかな？最後に、広之進さんのように、〇〇一路をいう言葉をつくってみよう&gt;                         </td> </tr> <tr> <td colspan="3" style="border: 2px solid black; text-align: center; padding: 10px;">                             広之進さんのように目標をもつことができた                         </td> </tr> </table>	・世界一になりたいという目標を持っている。	・ハンディーキャップを持っている。	・誰よりも負けず嫌いな選手。	<広之進さんはどんな選手だったかな？> <水泳選手の広之進さんは、どんな努力をしたのかな？>			・指のハンディーキャップを克服しようと、地球一周半もの距離を泳いだ。	・コーチもいなかったの で、自分で練習方法を考え、人の何十倍も泳いだ。	・水泳をひたすら頑張った。	<努力の結果大会ではどうだったかな？>			・日本選手権では優勝したが、オリンピックでは良い結果が出せなかったみたいだな。			<「何も言わずプールサイドから立ちさった」広之進さんは何を考えていたのかな。> <指導者になった広之進さんは、後輩に何を伝えたかったのかな。>			<選手時代と全く変わらない「水泳に対する思い」はなんだろう。>			・大会に負けてくやしくてならない気持ち。	・もう自分はだめだと諦めている気持ち。	・もう一回挑戦したいと思う気持ち。	・水泳が好き	・魚になるまで泳げ	・努力すること	・生活態度や熱意も水泳に影響すること。 ・魚になるまで泳げ ・後輩に金メダルを取って欲しい。 ・心がちゃんとしていないと世界では勝てない			<広之進さんは指導者になって行って後輩選手を育てていったんだね。「泳心一路」とは水泳一本にかけた広之進さんの思いが詰まっている言葉だね。> <今、自分は何か目標をもって、努力しているかな？最後に、広之進さんのように、〇〇一路をいう言葉をつくってみよう>			広之進さんのように目標をもつことができた			・初読後の感想を聞き、具体的な発問に入っていく。  ・広之進さんのひたむきに努力する姿を読みとる。  ・最終段落を読んで、教師が簡単なまとめをする。 ・難しいと思うので、例を挙げて、子ども達に言葉を作らせる。 ・作成できない子には一路にこだわらず、目標をたてさせる。
・世界一になりたいという目標を持っている。	・ハンディーキャップを持っている。	・誰よりも負けず嫌いな選手。																																				
<広之進さんはどんな選手だったかな？> <水泳選手の広之進さんは、どんな努力をしたのかな？>																																						
・指のハンディーキャップを克服しようと、地球一周半もの距離を泳いだ。	・コーチもいなかったの で、自分で練習方法を考え、人の何十倍も泳いだ。	・水泳をひたすら頑張った。																																				
<努力の結果大会ではどうだったかな？>																																						
・日本選手権では優勝したが、オリンピックでは良い結果が出せなかったみたいだな。																																						
<「何も言わずプールサイドから立ちさった」広之進さんは何を考えていたのかな。> <指導者になった広之進さんは、後輩に何を伝えたかったのかな。>																																						
<選手時代と全く変わらない「水泳に対する思い」はなんだろう。>																																						
・大会に負けてくやしくてならない気持ち。	・もう自分はだめだと諦めている気持ち。	・もう一回挑戦したいと思う気持ち。																																				
・水泳が好き	・魚になるまで泳げ	・努力すること																																				
・生活態度や熱意も水泳に影響すること。 ・魚になるまで泳げ ・後輩に金メダルを取って欲しい。 ・心がちゃんとしていないと世界では勝てない																																						
<広之進さんは指導者になって行って後輩選手を育てていったんだね。「泳心一路」とは水泳一本にかけた広之進さんの思いが詰まっている言葉だね。> <今、自分は何か目標をもって、努力しているかな？最後に、広之進さんのように、〇〇一路をいう言葉をつくってみよう>																																						
広之進さんのように目標をもつことができた																																						

## 泳心一路

「水泳では絶対負けるものか。」

水泳が大好きで、誰よりも負けず嫌いな古橋広之進という少年がいました。一九二八(昭和三)年、広之進は、浜松市雄踏町で生まれ、小学生の頃から水泳で、彼に勝てるものはいませんでした。中学校へ進学したとき、日本は戦争中で、広之進も武器をつくるための工場で働かなければなりませんでした。その工場で、広之進は左手を機械に挟まれ、中指の一部を失ってしまったのです。

「もう水泳はできない。」

と、広之進はくじけそうになりました。しかし、広之進の心の中には、「水泳をあきらめたくない」という強い思いがありました。そして、家族や友達の励ましに支えられ、

「もう一度水泳に挑戦してみよう。」

と、決意したのです。

それから広之進は、以前にも増して水泳に打ちこみました。「魚になるまで泳げ」と、自分自身に言い聞かせ、指のハンディーキャップを克服しようと、一年間で地球一周半もの距離を泳ぎました。

こうした広之進の努力が、ついにおくわれるときがやってきました。一九四七年、日本で一番大きな水泳大会で優勝したのです。その次の大会でも、前回より速いタイムで優勝しました。

日本で一番になった広之進は新たな目標をたてました。

「オリンピックで一位になって、世界で一番速い水泳選手になりたい。」

というものでした。広之進は、新しい目標に向かって、努力をかさねました。このころは、水泳を教えてくれるコーチもいなかったため、自分で練習方法を工夫し、人の何十倍も泳ぎました。

ついに、一九五二年のヘルシンキオリンピックの日がやってきました。広之進は、「今までの努力の成果を出してやろう」と意気込み、スタート台に立ちました。

日本の期待を背負った広之進は、一生けん命泳ぎました。しかし、八位という結果に終わってしまいました。そして、広之進は何も言わずに、プールサイドから立ちさりました。

広之進は日本に帰り、指導者として、後輩選手を指導し始めました。「魚になるまで泳げ」と言い続け、きびしく教えめました。

「今の日本選手は水泳に対する熱意が足りない。生活態度や気持ちも水泳には大きく影響するのだ。心がちゃんとしていないと、世界では勝てない。」

と、きびしく指導するという一面もありました。

指導者になってからも、広之進の水泳に対する思いは選手時代と全く変わらないものでした。

広之進の思いにこたえようと、選手たちは世界で活躍するため、練習にはげみました。その中から、岩崎恭子選手や北島康介選手などの多くの後輩選手が、オリンピックで金メダルを取ったのです。広之進の思いは後輩選手にうつがれ、彼の果たせなかった夢をかなえたのです。

のちに、広之進は自分の人生をこう振り返っています。

「人間というのは、大きな目標をもって一筋に努力し、工夫し、苦しみにも耐えてこそ、大きく成長していくものです。

私は、水泳から多くの事を学びました。『泳心一路』は、そんな私の人生であります。」

(資料3)

第6学年2組道徳指導案

MT:長谷川夏希 AT:大杉拓人

- 1 日時、場所 平成23年1月31日(月) 第4校時 6年2組教室 男18人 女7人
- 2 主題 夢と家族 1-2 勤勉・努力 3-1 自他の生命尊重 (自他の生命尊重に重点をおく。)
- 3 ねらい 危険をおかしてまで夢を叶えるか、家族のことや自分の命を粗末にしないために夢を諦めるかというかざくんの葛藤を話し合うことを通して、高い目標を立て、希望と勇気をもって努力することや生命がかけがえのないものであると知り、自他の生命を尊重する気持ちを養う。
- 4 本時の展開 (11時35分~12時20分)

段階	学習活動 (○教師 ・子ども)	留意点
導入 5分	<p>○自己紹介と授業の説明</p> <p>○「みなさんには、将来の夢がありますか?どんな努力をしていますか?」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「サッカー選手になることです。毎日練習をしています。」</li> <li>・「夢はありません。」</li> </ul> <p>○「今日は夢を家族に反対されたかざくんとという男の子の話をしませう。夢を反対されたかざくくんはどんな気持ちだったのでしょうか。」</p> <p>○紙芝居①~⑥を読む。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アイスブレイクで子どもと距離を近づける。</li> <li>・MTが将来の夢を言い、次の発問への流れをつくる。</li> <li>・夢を実現させるためにどんなことをしているのか聞き、夢を実現させるためには努力が必要だということに気付かせておく。</li> <li>・将来の夢がないと答える子どもには「やりたいことはありますか?」という質問に変える。</li> <li>・かざくんの気持ちになって聞くように促し、考えやすくする。</li> <li>・MTは感情をこめて読む。</li> <li>・ATが、黒板に紙芝居を貼る。ポイントとなる言葉をふき出しにして紙芝居のまわりに貼る。</li> </ul>
展開 25分	<div style="border: 2px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>もしあなたがかざくんだったら、夢をかなえようとうしますか。それとも、夢をあきらめますか?</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートに記入しながら考える。(5分)</li> <li>・夢をかなえる派と夢をあきらめる派に分かれる。</li> <li>・グループで話し合う。(3分)</li> <li>・発表する。(15分)</li> <li>・「夢を叶える。小さい頃の夢だったから諦めてしまったらもったいない。」</li> <li>・「あきらめる。家族に心配を掛けたくない。」</li> <li>・「あきらめる。自分の命は大切だから。」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「もし自分だったら」ということを念を押して伝え、周りの意見や一般的な意見に流されないようにする。</li> <li>・ワークシートを配布する。</li> <li>・ワークシートの説明をし、右欄に記入させる。この時、中立的意見はないということを伝える。</li> <li>・机間巡視をする。(子どもの名前を見ておく。)その時に、危険な国に行くということは自分の命に危険があるということに気付かせたい。「命の大切さ」についての意見がでてくるように、考える時間に夢を諦める派の児童にヒントを与える。</li> <li>・MTは子どもの意見に揺さぶりをかけたり、発表に対する付け足しや相手側の意見を聞いたりする。(話し合いを盛り上げる。</li> <li>・話し合いが終わらなければ、途中で切って終結に入る。</li> </ul>
終結 15分	<p>○「この紙芝居のお話は実際にあった話です。」</p> <p>伊藤和也さんの出身・アフガニスタンについて・和也さんが亡くなってしまったこと・和也さんのアフガニスタンでの実績のことを伝える。(10分)</p> <p>・この話を聞いた後の感想を書く。 (残り時間&amp;休み時間)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・伊藤和也さんが静岡県民だということを伝え、静岡県の偉人について知ってもらう。</li> <li>・アフガニスタンの様子は、言葉より写真を多くつけて視覚的に伝える。</li> <li>・和也さんが亡くなった事実を知って、自分の意見は正解・不正解という流れにならないように、みんなが考えた「理由」(命の大切さ、夢の実現、家族への愛情など)が大切だということ、そして判断を自分で下す大切さを伝える。</li> <li>・和也さんは亡くなったが、自らの夢を叶え、アフガニスタンの人々のために活躍したことを伝える。</li> <li>・ワークシートの左欄に記入させる。</li> <li>・回収する</li> </ul>

夢と家族

導入

「みなさんは、将来の夢がありますか？」

「今日は、夢を家族に反対されたかずやくんという男の子の話をします。かずやくんの気持ちになって紙芝居を聞いて下さい。」

紙芝居①

かずやくんは、とても家族思いで優しい男の子です。自分で決めたことは、最後まであきらめずにやり抜くといった強い心ももっています。

紙芝居②

かずやくんは、小さい頃から野菜や果物を育てることが大好きでした。そんなかずやくんの小学校の時の夢は、食へ物を作る仕事をするのでした。かずやくんは、大人になってからも小学生のころの夢をずっともち続けていました。

紙芝居③-1

ある時、かずやくんがテレビを見ると、食へ物がなくて苦しんでいる人たちの映像が流れてきました。なぜなら、その人たちが住んでいる国では長い間雨が降らず、作物が育たなかったからです。さらにその国では、戦争もたびたび起きていました。

紙芝居③-2

(食へ物が無い様子を表した絵と戦争をしている絵の両方が書かれた絵)

紙芝居④

そのテレビを見たかずやくんは、「たとえ戦争をしている国でも、この国に行って、食へ物に困っている人たちを助きたい。ぼくが育てた野菜や果物を食へさせて、元氣を与えてあげたい。」と家族に言いました。

しかし、家族は「食へ物も十分でない上に、戦争もしている国なんか行って、おまえにもしものことがあったらどうするの！そんな危険な所には行ってほしくない！」と反対しました。

紙芝居⑤

この言葉を聞いたかずやくんは、「夢をかなえたい。」という気持ちと「家族に心配を掛けたくない。」という二つの気持ちの間でどうすればいいか悩んでしまいました。

発問

「もしあなたが、かずやくんだったら、危険な国に行って夢をかなえようと思いますか。それとも、家族を心配させないようにするために、夢をあきらめますか？」